

学道一如

発行 高校
小樽双葉通信
生徒会通日
2023年9月5日
第30号

特集▼小樽再発見(5)佐々木一夫氏 小樽運河プラザ喫茶一番庫マスター 「小樽に偽物は似合わない」

小樽運河保存運動の中核を担う若者のたまり場となっていた伝説の喫茶店「叫児楼」の元店主である佐々木一夫さん(73歳)は現在、小樽運河プラザ(左写真) 喫茶一番庫のマスターとして観光客を出迎えている。かつてはポートフェスティバルを作った「ポート三人組」のお一人でもある。小樽生まれ、Uターン組の佐々木さんの小樽への熱い思いをうかがった。



旧小樽倉庫。明治23年建立。小樽独特の木骨石造倉庫の一つ。



佐々木一夫氏 花園の写真店に生まれる。運河や港は遊び場だった。札幌の喫茶店で5年間、修行し、自分の店を持つ前にヨーロッパの主要都市を旅して「小樽に通じる」ものを感じ、札幌ではなく小樽での開業を決意した。1975年に「叫児楼」をオープンする。

小樽で喫茶店を

叫児楼は質屋の石倉を改造した店で2000年まで25年間、オーナーとして切り盛りした。現在は別の方が経営されている。「開店した当時は丁度、北一硝子さんが売れ出した頃で、ロコミでお店に来る人が増えたんです。食器やランプを北一さんのもので揃えました。」

飯半がアジト

叫児楼には若者が出入りした。小樽の街の話で意気投合するとその後、蕎麦屋の飯半の二階に場所を移して、議論を続けた。疲れると座布団を枕に朝まで話し合った。「真剣勝負でした。」伝説のポートフェスティバル(1978年、第1回)は人ではなく「小樽の神様が動かした」という。

ポート三人組の中で山口保さんはプラン、アイデアを出す人、小川原格さんは設計(やり方を指南)する人、佐々木さんは施工する人(実行役)、という役割ができていた。「港で何かやるうということになったけど、何を、となった。その頃、北大大学院建築学科の柳田さん、石塚さん、森下さん(北大三人組)が「小樽運河保存のための港湾開発と運河再利用計画展」を実施していて、山口保さんが「これだ」とひらめいた。運河や倉庫の魅力を再確

認する催しにするのだ。

資金はゼロの市民の祭りだから、市民にタオルを買ってもらい、資金調達した。一本300円、何のためにやるのか真剣に説明したよ。」

ポートフェスティバルには予想を上回る8万人の観客が押し寄せた。

半分残った運河は偽物

運動は盛り上がり、10万人近くの運河保存署名が集まったものの、運河は半分埋立てられ、道路は造成された。やがて小樽は観光客が年間八百万人押し寄せる観光都市になっていった。「僕は運河が残っていないと言っています。観光客の方がここに来て、「運河はどこにあるんですか」って聞くんです。橋の上を通って見ているのに気づかないんだね。小樽に偽物は似合わない。」

横路孝弘さんが生前、言ってくれたよ。「佐々木さん、道路の下に運河の護岸の石が置いてあるから、掘り起こせば、運河は出てくるよ」ってね。当時の市長も運河埋立てに本当は賛成ではなかったとも聞いている。道路や埠頭ができて小樽は豊かになっていない。検証が必要だよね。」

山口保さんたちは運河と平行して残る手宮線に注目し、1999年から「小樽雪あかりの路」

を開催している。

小樽の観光に来る人には「旅人」であってほしい。本当の小樽の良さを見て、知ってほしい。堺町通りは、小樽らしさが薄れてしまった、と語る。

これからの小樽については、古いものを残す街になってほしい。そこに大切な記憶があるから。また、古いものを取り入れて生かす街になってほしいと願っている。港の有効利用も課題だという。たとえば災害支援指定港になっていることを意識し、地場産業の段ボールやゴムを生かすことも考えたい。

好きなことを追求しなさい

高校生へのメッセージ

自分の好きなことを求めてやっていくといい。苦しくても放り出さない。お腹いっぱいよりも胸いっぱい。そして、小樽のことを一生忘れないでほしい。

若い世代へのバトン

大塚翔太(14)

佐々木さんのお話をうかがい、今の小樽は本来の小樽ではないの、本当の良さをみんな知らないのだと思いました。また、観光や景観など問題も少なくないと感じました。

これから、若い世代が街づくりを担っていくことになるでしょう。私たちが小樽のことを学び準備していきたくと考えます。